

日本人にとっての「常識」の重要性について

李 王 麟

はじめに

本稿では、日本人の「常識」の重要性について分析していくが、その手法としては、現在の日本が抱えている国際化の問題や技術の近代化による便利さの追求、現代日本の若者の規範意識、あるいは宗教的なものとの関わり合いなどをその分析過程で取り上げ、中国の寓話、あるいは世論などを引用し、比較しながら、検討をしていくことにする。

I. 常識とは何か

「日本人ほど常識を大切にしない人はいないだろう」と来日した外国人にはよく言う。その理由は外国人が日本人と話す場合、日本人は「そんなことぐらい常識だ」とか「君の行為は常識からはずれている」という言葉をよく口にするからである。しかし、常識とはいったい何であろうか。

この言葉は『広辞苑』には、「普通、一般人が持ち、また、持っているべき知識。専門的知識でない一般的知識とともに理解力・判断力・思慮分別などを含む」と書かれてある。つまり、それはある社会で、人々の間に広く承認され、当然知っているはずの知識や判断力と解釈できるであろう。いわゆる常識とは、「社会人として当然有しているべき知識や予想」と言えるであ

ろう。もし、その知識や予想から外れた状態になると、「非常識」と言われる恐れがあるのである。

ところで、「当然知っている」と予想される事項はどんな尺度で判定したらいいのであろうか。これはかなり困難を伴う作業である。異文化圏で育った人間はもちろん、同じ文化圏で育った人間でも社会環境や教育環境によって、それぞれが有している常識の多寡とその分野も異なってくる。従って、物事に対する理解力や判断力や価値観なども当然異なってくる。例えば、田舎育ちの人間が都会育ちの人間に軽蔑されるのはそれと無関係とは言えない。しかし、都会育ちの人間は田舎に行くと、田舎育ちの人間に笑われることも少なくない。

中国には「東郭先生」というつぎのような寓話がある。

ある日、学者の東郭先生がロバに乗って、隣国へ行く途中、一匹の猟師に追われ、ふうふう言いながら走ってきた狼に出会った。その狼が「命が危ないから、どうか助けてください」と言って、頭を地に擦り付けて懸命に東郭先生に頼んだ。「それはいけない」と、先生は本をいっぱい詰めた袋をすぐにロバの背中から下ろして、その本を全部出し、狼にその中に入るようにと手まねきをした。しばらくすると、そこに猟師がやってきた。「狼を見ませんでしたか」と、その猟師は先生に尋ねた。先生は「向こうの方へ走っていったようだが」と、わざと逆の方向を指差した。猟師は「そうですか、どうも」と言って、その方向へ追いかけていった。やがて、「早く出してください。息が詰まりそうだから」と、袋に入った狼の声が聞こえた。袋から出してもらった狼は「俺は、もうまる三日もなにも食っていねえんだよ。助けてもらったが、この爺をとことんまで」と言って、先生に襲いかかろうとした。先生は大慌てて、「助けて」と大声で叫んだ。ちょうどそこを鋤を肩にした一人の農夫が通りかかった。「どうかしたのですか」と、農夫が尋ねた。狼は先手を打って「この爺が俺を袋に詰めて殺そうとしたんだ」と、言い張った。農夫は「えっ、本当かい。こんな小さい袋なのに、信じられんな。もう一度入ってみてごらん。もし、ちゃんとは入れたら、この爺を食わしてやる

から」と、狼を促した。すると、狼は言われた通りに袋に潜り込んだのである。農夫は早速鋏を振り回して、狼を袋叩きにしようとした。その時、先生は「止めてくれ、そんなことをしたら、死んでしまうぞ」と言ったが、農夫は何も言わずに、ただ懸命に叩き続けた。後で、農夫は「狼はやっぱり狼だ。その凶悪な本性は変わるもんじゃないよ」と、言った。

この寓話の場合、東郭先生と農夫はどちらが非常識なのか。言うまでもなく、農夫のほうが常識を有していると言えるであろう。東郭先生はいわゆる学者ばかりである。昔の中国の文人は毎日のように書齋に閉じ籠もって、「三綱五常」などの本ばかり読んでいた。それ故、文人たちにとっては、「どんなことがあろうとも、勝手に殺生するのは絶対にいけない」との思いがあったのである。言い換えれば、「君子は口を使って手は出さない」、あるいは「君子は人の美を成す」などの原則を守ろうとしたのである。さらには、文人たちはどんなことに対しても、理屈ばかり主張していた。つまり、理屈が合わなければ、死んでも、死にきれないぐらいの気持ちを持っているのである。しかし、彼らは理屈のみを求めるあまり、世の中の常識には全く疎い状態であったのである。彼らの「常識」は、常に現実世界の状況とはかけ離れた机上の論理であった。これに対して、農民は毎日畑仕事をし、理屈よりも様々な害虫と戦っているという生活の中での実体験とその中で養われた知恵が非常に豊富であった。それ故、狼のような人の命を奪う野獣を殺すのは、農夫にとっては当然の行為なのである。

ご承知のように、六十年代の半ば頃、中国では文化大革命が起こった。そのとき、孔孟の教えはもちろん、すべての旧文化や旧思想は批判の対象になってしまった。ところが、前述の寓話だけは例外として批判の対象から外され、中学校の国語教科書に採用されたのである。それは単なる偶然とは言えない。当時、多数のいわゆる「机上の論理を振りかざしている」と批判されたインテリ階層の人々は思想改造を強制され、いわゆる「下放」と称されて、農村地域へ送られ、農業に従事させられたのである。それは、農村で実体験をさせなければ、五穀の見分けもつかないまま、教育者になることは絶対に認め

ることはできないという理由からであった。また、大卒者はもちろんのこと、中卒や高卒も知識青年として、農村に下放させられ、そこで二、三年間働かなければならなかったのである。いわゆる「貧下中農による再教育」を受けるときとされたのである。その理由として、農民こそが多くの実用的な知識、言い換えれば、大衆の中でよく話題になった知識（＝常識）を有していると言われていたのである。ここでは、常識とは人々が社会生活を営む上で必要な実用的な知識と言えるであろう。

Ⅱ. 日本社会とは如何なる社会なのか

1. 日本における共通の法則

ある社会に生き残るためには、そこでの共通の生存するための法則を知らなければならない。日本は資本主義の社会であり、いわゆる自由が満ちあふれた世界だと思ふ外国人が少なくないだろう。しかし、実際に生活してみると、そうでもないのではあるまいか。

たとえば、日本のバスに乗るとき、かならず後ろの乗車口から乗る。降りるとき、前の降車口から降りることになっている。また、土足厳禁という場所もある。

さらに、ごみを捨てるとき、燃えるごみと燃えないごみを事前に分けておかなければならない。また、ごみを捨てる当日になると、今日は何曜日なのか、何を捨てたらいいのか等、一つひとつチェックしなければならない。この作業は慣れない者にとっては神経を使う作業である。

アパートを借りるときには、家賃や敷金以外に礼金が必要である。また、入居できたとしても、決して楽ではない。常に部屋や台所やトイレを清潔に保つのが肝心である。それから、壁や家具などに傷をつけるといったことは要注意である。たとえ釘一本でも勝手に打ちつけてはならない。これらのことは日本人ならば、誰でもが承知している当然守るべきルールであるが、このルールも「常識」という概念に入るだろう。来日した外国人はたとえ抵抗

があっても同じルールを守るほうが無難である。そうしなければ、ルール違反とか非常識と言われるに違いない。

日本人は[ルールを守る模範]だと言っても過言ではない。今年のワールド・カップの試合で、日本チームはトルコ・チームに敗れてベスト 16 になったが、試合全体から見れば、日本の選手は相手の選手のシャツを掴んだり、足をかけて倒したりするルール違反の行為はほとんどなかったのである。

日本社会は社会規範を厳しく遵守する組織体であるが故に、全体的に見れば、極めて画一的であると言える。日本経済をリードするビジネス営業マンは白いワイシャツに灰色のスーツという制服を着、手にはスーツ・ケースを提げ、頻繁にぺこぺこお辞儀するのが定番である。また、大学生は別として、小学生や中学生や高校生たちはみんなそれぞれの学校の制服を着ている。各会社にも各自の制服（作業服）がある。場合によっては、アルバイトやパートでも仕事をするとき、同じ制服（作業服）に着替えることもある。日本は国全体が職業別、あるいは身分別に画一化されていると言える。正に、日本は規範社会と言えるであろう。また、その社会を支える人々のさまざまな規範意識がその裏に潜んでいる。この社会では一人前の社会人になるには、少なくとも次のような公共規範意識を身につけておかなければならない。

a. 公的な場における規範

- ①人が並んでいる列に割り込みをしないこと。
- ②図書館の本など借りた本には書き込みをしないこと。
- ③公園や空地に空き缶や吸殻、紙くずなどを捨てないこと。
- ④受付のボールペンを持ち帰ってはいけないこと。
- ⑤順番待ちする人がいる場合に、公衆電話で長電話しないこと。
- ⑥道に唾や痰をはかないこと。
- ⑦公共の場で、大声で話さないこと。
- ⑧道を歩きながら、飲食や喫煙をしないこと。
- ⑨込んでいる電車では、年寄りに席を譲ること。

b. 人間関係における規範意識

⑩ 約束の時間に遅れないこと。

⑪ 陰で人の悪口を言わないこと。

⑫ 借りたものは返さなければならないこと。

⑬ 友人や先生や上司に対して、傷つけたり、ばかにしたりしてはいけないこと。

⑭ 友人や先生や上司に対して挨拶をすること。

このほかにも、職場や学校や家庭における規範意識などがまだまだたくさんあるが、とにかく各自が頭に入れておくようにしなければならない。

ところで、私的な生活はどうかと言えば、やはり、教条主義に束縛されることが多い。つまり、全て決められた通りにしなければならない。たとえば、どこかへ旅行に行く場合には、必ず予算内でスケジュールを組み、日程通りに行動する。また、誰かと行動を共にする場合には、互いに事前に連絡を取り合い、時間を厳守しなければならない。さらに、なにか料理を作る場合には、塩は何グラムか、味醂はどのぐらいかなど、目盛りがついた容器で量ってみないと、安心できないなど様々な事例がある。

また、客をもてなす場合には、何茶にするのか、客に出すお茶と組み合わせる茶碗がどれにするのかなど、一つ一つセットしなければ、気がすまない。

このように見てみると、日本社会は決して楽な社会だとは言えない。むしろ、生活する上で、かなりの神経を使わなければならない国だと言ったほうがいい。日本人が絶えずストレスを溜めているのはこのような様々な規範と無関係とは言えない。

しかし、ルールばかりを主張してきた日本人は戦後、経済や工業や科学技術などの各分野にわたって目覚ましい発展を遂げた。今では世界有数の先進国となった。この国では、自動車、造船、電気製品、化学、紡績、交通機関などが非常に発達している。また、温泉、ゴルフ、ボウリング、競馬、競輪、パチンコ、マージャンなどのレジャー産業や観光施設は十分に整備されている。これらは外国人には大変魅力的な存在として映っている。

2. 便利さを求める日本

ところで、もっとも評判になるのはこの国の便利さである。

たとえば、日本の店で何か買う場合に、その店側は客に安心感を与えるような雰囲気作りをする。これは、偽物に対する日本人の警戒感を取り除くことを考えているのであろう。例えば、食品の場合であれば、賞味期限、原材料、消費期限、栄養成分、問い合わせ場所などが貼られてあるラベルに明記してある。日常用品にも取扱説明書が必ずついている。それはステップ・バイ・ステップで、文字情報だけではなく、図解によって視覚的にも説明されており、消費者にとっては、極めてわかりやすいものである。たとえ初心者でも、すぐその使い方を身につけることができる。これに対して、中国では何か買う場合に、非常に神経を使う。まず心配することは、偽物を買ってしまうことである。さらに、人を悩ませるのは、わかりにくい取扱説明書である。場合によっては、よほどの専門知識が無ければ、どうしようもないこともある。学習参考書やパソコン雑誌でも無造作な解説が見つかることがある。電話で聞いてみると、「それぐらいこと、わからねえのか」と、返答があった。「これぐらいのことは消費者は当然知っているもの」として店側は販売していると思えないのである。日本語で言えば、「常識的なことも知らない」と、言われたのと同じような感じである。

また、日本ではどこへ行っても便利である。たとえば、電車やバスは定刻に到着する。最も注目すべき点は、乗客はみんな白線側の後ろへ下がって、順番に待っていることである。だから、乗る場所は常に秩序よく、整然である。もちろん、ラッシュ・アワーの電車の混雑はまさに凄まじいが、それでも、乗り降りのために、喧嘩をする人はほとんどいない。たとえそのような場面があったとしても、駅員は乗客をとりなして、駅での秩序を維持するようにするのである。

日本で二、三年間留学した中国人は一旦帰国してしまうと、中国でいろいろな不便さを感じるようになる。たとえば、中国製のインスタント食品を買おうと、開け口はいくら探しても、見つからない。結局、はさみで切る以外に

は道は無い。これでもいいが、最も我慢できないのはやはり交通の不便さである。

北京の道路整備は前よりずいぶん進んでいるが、しかし、依然として交通難である。特に、雨の日と雪の日には、バスを利用する通勤、通学の人が大勢いる。その場合は泣き面に蜂というか、いくら首を長くして待っていても、バスはなかなか来ない。やっとバスが来たと思ったら、老若男女を問わず、押し合い圧し合いでバスの乗車口に殺到する。その混雑はまさに殺人的と言っても過言ではない。もし、日本人のように順序よく順番を待つとすれば、二、三時間待っても乗れないかもしれない。

このように考えると、しっかりルールを守るのも決して悪いことではない。そのようなルールこそが日本社会の繁栄の土台なのである。そして、ルールだけでは十分ではなく、政策の実施と同様、如何に優れた政策であったとしても、その政策に従う人間がいなければ、その政策は有名無実の存在になってしまうのである。この一つの例をつぎに挙げてみよう。

かつて、ある日本の会社で管理職を務めた中国人が国へ帰ったら、中国の会社の人々に軽蔑された。つまり、彼が日本で覚えた管理知識は中国ではなかなか通用しなかったのである。彼は「機械は同じだが、人間は違うのだ」と嘆いた。つまり、日本では常識とされることが、中国では非常識とされていたのである。

中国人の間では、チーム・ワークはなかなかうまくとれないとよく言われている。その主な理由としては、中国人は全員が「諸葛孔明」であり、各自の常識を活用しながら、お互いに誰にも負けないように社会生活を営んでいるということが挙げられる。それ故、力をあわせ、タイアップするのは困難である。当然、日本人のように共通ルールを守ることは容易なことではない。

以上のように考えるならば、ある社会におけるルールというものは、いつでもどこでも通用するものとは限らないし、そこでの「常識」も例外ではない。

Ⅲ. 国による「常識」の違い

常識は国によって風俗習慣が異なると同様に、社会によってもそれぞれ異なる。すなわち、他国の社会に入ると、自分の国の常識は通用しにくくなる場合が多分にある。

1. 「料理と酒」の常識

日本の中華料理店にはたいてい紹興酒が置いてある。すると、「中華料理にはやっぱり紹興酒が合うよね」と思う人がいるはずである。この意見は一見すれば、常識のように見える。ところが、中国ではレストランなどで「紹興酒をください」と注文すると、「そういうお酒は当店には置いてありません」と返答される。このような話をすると、首を傾げる人がいるかもしれない。これは、中国では酒は地方によって種類がずいぶん違うためであり、北京の人または北方の人は「二鍋頭」などという白酒を飲むことが多いからである。「白酒」は度数56度の強い酒であり、アルコールの含有率が紹興酒よりずっと高い。場合によっては、たとえば、正月の祝いや男児の出産の祝い、あるいは長寿の祝いなどといった場合は、「五糧液」や「茅台酒」など高級酒を飲むこともある。

紹興酒は魯迅の故郷である浙江省紹興で醸造された地酒である。それは北方の人の家庭においては料理酒として使用されているにすぎないのである。最近では、南方の人の家庭においてもめったに飲まれなくなったようだ。ところが、このような酒がどういふわけかいつの間にか日本では盛んに飲まれるようになった。話によると、日本の中華料理店の料理人はほとんど中国の福建や広東の出身者だそうであるため、このような話は中国料理には紹興酒がつくようになったのであろう。

ところで、日本人は酒が好きであるが、あまり強い酒は飲めない。店に入ると、まずなにをおいても、「とりあえずビール」という表現がまるで口癖のようにになっている人がほとんどであろう。特に、夏になると、ビールは定

番の飲み物として日本人には定着している。その理由として、『日本人の素朴な疑問』の著者のハイパープレスが次のように解説している。

「夏冬を問わずこれほどまでに日本人が「ビール、ビール」と騒ぐようになった要因は、まずほかの酒と比べてアルコール度数が高くないので、飲酒初心者でも比較的手が出しやすいという点が上げられる」¹⁾

とはいえ、夜の町では泥酔した日本人の姿がよく見かけられる。実は、彼らはただビールだけを飲むわけではなく、日本酒、ウィスキー、ワインなども飲む。また、何軒もの飲み屋で酒を飲む、いわゆる「はしご酒」をする人もかなりいる。度数が低い酒でも、何種類もの酒を交互に飲めば、誰でも酔ってしまふ。これは中国では酒好きの人は誰でも知っている常識であるが、どうも日本人には通用しないようである。また、中国にはもう一つ酒についての常識がある。それは上司や同僚と酒を飲む場合には、なるべく酒を控えるように注意するということである。その理由は、あまり飲み過ぎると、口を滑らせ、言わなくてもいいことまで話してしまうことがあるからである。もし、話してしまうと、後日、自分では何のことか理解できないまま、ひどい目に遭う可能性がある。

これに対して、上下関係が厳しい日本社会では酒は人間関係を円滑にするための潤滑油—勿論、酔っぱらってはいけないが—の役割を果たすものとの考え方もある。花見、納涼会、新人歓迎会、忘年会などはもちろん、普段、会社が終わると、同僚や上司などに「今晚、いっぱいやろうか」と、誘われることがたびたびある。酒が飲めない人はかえってつまらないやつだと思われる。特に会社の集まりでは、「無礼講」を盾にとって、たとえ酔っても人に楽しんでもらえさえできれば、大いに歓迎される。しかし、限度をわきまえることも忘れてはいけないのが常識である。しかし、外国人の目から見れば、日本人は酒で大騒ぎしすぎである。このように考えると、日本における「常識」は多少一方的な感じである。

2. 外国と常識

海外に行く日本人は少しでも訪問する相手国の言葉を覚えて行こうとするのが普通である。例えば、英語圏の国を訪問しようとする場合には、“Thank you, How are you, How much is it ?”などの言葉を覚えて行く。ところが“Help me, stop thief”のような言葉を覚えて行く人は何人いるだろうか。つまり、彼らは海外が怖い存在であるとは思っていないのである。いざ強盗に襲われると、「助けて！泥棒だ！」と、日本語で何度叫んでも、助けてくれる人はいない。というのは、言葉が通じないからである。根本的に言うと、その危険意識は最初から彼らの頭には無かったのである。

日本人は老若男女を問わず、常に大金の入った財布を持ち歩く。たとえ外国に行っても、日本国内と同様の習慣をしっかりと守ってしているのである。特に、買物をするとき、やたらにバッグをカウンターに置き、品物の選択に夢中になる人が多い。そのうち、パスポートや財布を入れたバッグがなくなっていることに気づく。この光景はたびたび目にするものである。これとは反対に、中国人はほとんど財布を使わないことにしている。それは、電車やバスに乗った時にはスリに盗られやすいという恐れがあるからである。また、大金を持つ場合には、普通ばらばらにして、いくつかのポケットに分けて入れる。よく日本人は「中国の金の札は皺だらけで汚い」と言うが、それにはこのような背景があるためである。また、海外に行き、買物をするときには、しっかりバッグを手に握り、周囲に注意をしながら、用心深く品物を選択しなければならないのも常識である。また、日本では「これ、ちょっと見てね」と、誰かに頼んで、トイレに言ってもかまわない。ときには、どこかに忘れ物をしても、その場所に戻ってみると、その忘れ物はそのままそこに置いてあることが多い。ところが、中国ではどうか。上述したトイレの場合、荷物のある場所に戻ってみると、その荷物はもちろん、荷物を見ていてくれるようにと頼んだ人ももうその場にはいないだろう。つまり、自分の荷物を人に見てもらおうということは、「この荷物を持って行ってください」と言わんばかりの行為なのである。

3. お茶と常識

ご承知のように、中国はお茶の大生産国であり、お茶をよく飲む。しかし、中国人は普段急須やティー・ポットはめったに使わない。公的な場に客を招待したとき、コップを出してお茶を入れることがある。最も日本人が不思議に思うのはタクシーの運転手の手元に置いてある大きなガラス瓶であろう。何が入っているのかと聞いてみると、お茶だと言う。そこにいた日本人は全員が怪訝そうな顔をしていた。というのは、日本人が普通、お茶を入れる場合には、必ず急須を使うからである。日本人から見ると、ガラス瓶に茶の葉を入れ、湯をさして茶を飲むのはとんでもないことである。しかし、昔の中国では下層の人々は大きな椀でお茶を飲む習慣があったのである。解放後は、それに代わってエナメル製の湯飲みが盛んに使われるようになったが、現在では瓶詰め用のガラス瓶に変わった。中国人から見れば、どうせ個人用だから、湯きを癒しさえできれば、容器は何でもいいのである。だから、一般の家庭では礼儀を重んじる客のもてなし以外では、めったに急須を出して使わない。それ故、急須は普段家庭ではまるで飾り物のような存在である。しかし、日本人から見れば、それはルール違反ではないかと思いたくなるのであろう。少なくともおかしいなと思う人がいるはずである。中には「中国人の茶の作法は合理的だ」と言う人もいるかもしれない。

日本は茶道、華道、香道などの伝統的な文化を有している。茶の作法は日本にとっては、お茶を味わう一つ要素であり、または芸術的にも価値を有しているものである。それ故、茶道などでは、自然との調和を保つことはとても重要である。お茶を勧められたら、単にお茶を飲むだけでなく、その茶碗をよく見て、「いいお碗ですね」と褒める必要がある。これが茶道の礼儀作法である。日本人なら、これは当然知っている常識である。

長い茶の歴史を持つ中国で、日本人がガラス瓶でお茶を飲む中国人を見て、「ええ、そんなこと」と不思議に思うのも無理は無い。

それにしても、社会生活を営む上で、ある特殊な環境においては、臨機応変に対処しなければならない場合がある。たとえば、瓶ビールを飲みたいが、

手元に栓抜きは無い。すると、もし中国人なら、鍵で蓋を開ける人もいるし、箸で開ける人もいる。また、自分の歯で開ける人もいる。さらに、瓶をテーブルの角に引っかけて、手のひらで一発で開ける人もいる。とにかく、どんな方法でもいいが、蓋さえ開ければ、目的は達成されるのである。つまり、常識はある程度臨機応変に活用するものと言えるであろう。

4. 快適さの追求と常識

しかし、一部分の常識ばかり主張する日本人はどうも融通が利かないようである。

戦後、日本の経済発展とともに、日本国民の生活水準も高くなってきた。従って、衣食住についてはますます快適になり、贅沢に暮らせる人が多くなった。「水位が高くなれば船も高くなる」ように、土台となるものが高くなるにつれて、その上にあるものも高くなっていくのである。

だから日本人が外国に行くと、慣れないことが多いと考えられる。たとえば、北京に行った日本人は十中八九「咽が痛い」と言う。その主な原因は湿度の高い日本とは反対に北京は空気が乾燥しているからである。もう一つの原因は日本人がきれい好きすぎることである。十数年前の話であるが、ある日本人が万里の長城を見物したとき、急に便意を催したため、入り口の近くにあった公衆便所に入った。しかし、一分も経たないうちに戻ってきた。その理由は「臭い」であった。結局、その日本人はホテルに帰るまでずっと我慢していた。確かに当時の公衆便所などの観光施設は完備ではなかったが、しかし、トイレはある程度ぐらい臭いのが当たり前である。

日本人がトイレの臭いに驚くほど敏感であるのには驚かされた。現在、芳香剤や消臭剤が日本でよく売れているのはそのためなのであろう。その背景から考えれば、どうやら日本特有の風土も関係しているように思われる。湿度の高い日本は、カビや雑菌などが繁殖するのに好都合な気候条件を有している。トイレや自分の身边は常に清潔に保つのは当然と考えている。かつて、日本人は風呂が大好きなことや握手やキスの代わりにお辞儀で挨拶する習慣

があるのも、実は菌が伝染しやすい風土だからと言われたことがあるようだ。

確かに、人生の真諦を探求するなら、先進国に行くより開発途上国に行ったほうがいい。そして、意識的に自分の心身に苦勞をかけなければならない。

これについて、落合信彦は『日本人の常識を捨てる』の中でつぎのように述べている。

「私が若い人たちに言いたいのは、同じ時間を費やすなら、世界で最も汚染されたハワイのワイキキビーチなどへ行って意味のない時間を過ごすよりも、アフガニスタンの難民キャンプに行ったほうがいいということだ。そこで一カ月暮らしてきたら、世界の現実の一部が見えるし、人間の苦惱も見える。そして、必ずや成長するはずだ。

そして、自分のきちんとした目的意識を持つということも大切だ。ある国へ旅をするのだったら、確固たるなんらかの目的を持って行くこと」²⁾

IV. 社会によって異なる「常識」

生活における常識はよく話題になるが、そのうちに常識ばかりやたらに主張する人はいつも「自分なりの常識」が正しいと思い込んでしまうことがある。

たとえば、トマトの和え物を作るときに、日本人は普通塩をかけるが、中国人は砂糖をかける。どちらが常識なのか。おそらくどちらも常識だと言えるだろう。なぜかと言うと、「郷に入れば、郷に従え」というように、中国に行ったら、「トマトに砂糖」が常識であり、その反対に日本に来たら、「トマトに塩」が常識である。

また、同じ国で育った夫婦でも、出身地によって好みが違うように、同じ食べ物でも、味付けが異なる。たとえば、餃子を食べる場合、中身を何にするのか。当然、豚のひき肉、蕪、白菜と決まっていると思う日本人は多いが、中国の家庭では、必ずしもそうするというわけではない。家庭によっては、冬瓜、茄子、隠元豆、人参、トマトなどを中に入れることもある。時には、

いろいろ話し合っ、ようやく決まったかと思うと、また、たれに酢を入れるかどうかということをめぐる話し合いが始められることもある。というのは酢が嫌いな人もいるからである。

本来、餃子は中国の東北地方の食べ物である。昔の東北地方は大変寒いところであり、ことに、お正月頃には毎日のようにマイナス30度の天候が続いた。その寒さは耳を痛めるほどであった。すると、誰かが耳の形に似た餃子を作って、「これを食べたら、耳が痛くなくなるのよ」と言って、まわりの人に食べてもらったことが餃子の始まりだと言われている。こうして、お正月に餃子が食卓を飾るようになったのである。また、風邪を引かないために酢を適当につけたほうが良いと言われ始めてからは、餃子を酢につけて食べるのも今では常識になっている。

しかし、胃酸の多い人や冷え性の女性はすっぱい物に弱いので、あまり酢を食べないのも無理はない。もし、餃子を食べる時に、酢をつけなければ非常識だとされると、彼らにとって腹が立つのは当然である。

これについて、金田一春彦はつぎのように述べている。

「つまり、常識というのはそのぐらい地域や家庭によって、違うということだ。逆にいえば、常識とは必ずしも普遍的な知識ではなく、また、合理的で優れたルールというわけでもないのである」³⁾

筆者の個人的な見解を述べるなら、いわば、常識は習慣と密接な関係があると言えるであろう。我々は毎朝起きて、顔を洗い、歯を磨く。これはおそらくどこの国でも常識であろう。しかし、科学的な常識から見れば、毎晩寝る前に、歯を磨くのが合理的だとされている。とはいえ、朝、歯を磨く習慣はしっかりと身につけているので、たとえその行為が不合理でも一向に平気である。これはタバコを吸う人のように、「タバコは体に悪い」と知りながら、「吸わないと、口が寂しい」と言って、吸いつづけるのと同様である。つまり、どんなことでも、一度習慣になってしまうと、なかなか直らない。

個人の習慣、家庭の習慣または地域の習慣を固く守る人は自分の知っていることが世の中の常識だと信じきっている。だから、相手の行動が自分の予

想から外れると、やたらに「非常識だ」と言って、相手を非難するわけである。しかし、実際は予想された側と予想した側の両者ともは各々が知っていることは、各々が所属する「限定された範囲内の社会」から逸脱すると、両者とも「非常識」と判断されるであろう。

たとえば、ある家庭においては親が歯を磨かないとすると、その子は当然歯を磨かないはずである。ところが、よその家に行くと、その家の子が歯ブラシで歯を磨いているのを見て、きっとびっくりするであろう。すると、相手が非常識なのか、自分が非常識なのか、きっと迷うことになる。

この場合、唯一の検証方法は自分で一度やってみて、初めてそのよさがわかる。人の命は限りがあるので、知識は限りが無い。長いようで短い一生をかけてすべての知識を検証する余裕はないのではないか。それ故、読書も必要である。まして、学問には限りはない。また、様々な社会現象を一定不変のものとして単純に捉えてはならないのである。

V. 宗教的習慣と「常識」

イスラム教社会では、豚肉の料理は絶対に食べてはならないという不文律がある。というのも豚は彼らにとっては何でも食べる動物で穢れた存在であるからである。彼らの社会に入って、もし誰かは豚肉料理をむしゃむしゃと食べるなら、嫌われるだけでなく、痛い目にあうかも知れない。中国は少数民族が多く住んでいる国である。その中の回族の人々はイスラム教徒、あるいは清真教徒と呼ばれている。北京市の南西部には牛街という町がある。そこは回族の人々が集中して住んでいる地域である。ある日、一人の漢民族の人がスーパーで買った新鮮な豚肉をついそのまま近くの清真料理店に持ち込んでしまったばかりに、散々に殴られたばかりか、店から投げ出される羽目になったそうだ。この話からわかることは、相手の社会に入ったら、その社会の風俗習慣をしっかりと守るのが原則であるということである。民族習慣はその社会全体の人々の共同慣例であり、ほかの社会の出身だからという理由

は許されないのである。この場合、回族の人々にとって、宗教的タブーに背くことが最大の罪である。

ここ数年来、世界の民族、あるいは宗教の対立がますます激しくなりつつある。特に中東、インド、パキスタンなどは紛争が絶えず起こっている。その中でも、イスラム教徒のパキスタン人が人間爆弾となって、イスラエル人の居住地に突きこみ、数多くの死傷者を出した事件が相次いで新聞で報道されている。

日本はさすがに情報大国である。世界のどこかでなにか大事件があれば、即座にテレビあるいはラジオで全国に報道される。しかし、情報をいち早く日本国内に伝えるためには、現地で取材している数多くの記者とカメラマンはやむを得ず急激な変化の中での危険に直面せずにはいられない。というのは、その国自体、ことに国全体が一つの信仰宗教を持つ国家は外国人に写真を取られるのを極端に嫌がるので、武力衝突があった場合などは、外国の記者やカメラマンが殺害される事態が度々起こる場合があるからである。いわば、現地の人々からすれば、写真を撮られるということは、あたかも自分の魂を抜き取られるようなものと感じるのであろう。否、明確にそう信じているに違いない。百年前の話であるが、中国の清朝時代の統治者である西太后はカメラを向けられると、毅然としてきっぱりと断ったのもそのためである。

日本人は写真が好きな民族である。どこへ旅行するにも、カメラは欠かせない道具である。これは日本人の常識でもある。ことに、海外に行った時には、彼らはいろいろの場所に入り込み、数多くの記念写真をとったりしている。ところが、それがときには思いがけないトラブルを起こす場合がある。

落合信彦は前述した著書『日本人の常識を捨てる』の中でつぎのような事例を挙げている。

「グアテマラは多民族国家で、先住民のインディオが多く暮らしている。(中略) 彼らはそれぐらいとても素朴で、その上、非常におとなしくて、ふだんはおよそ暴力とは関係ない人たちだ。ところが、その彼らが暴力に走った場面を私は目の当たりにした。取材でグアテマラの地方都市に行ったときのこ

とだ。ちょうどイースター（復活祭）の時期だった。敬虔なカトリック教徒である先住民たちは、牛車にキリスト像やマリア像を乗せて静かに行進していた。その列に私に同行していた編集者が飛び出して行って、カメラを向けたのだ。ふだんでもカメラを嫌がる人たちにおごそかな儀式中にカメラを向けるということは、無神経かつ無礼きわまりない行為だ。いつもはおとなしい彼らもその編集者を蹴飛ばしたり、向こう脛を殴りつけたりした。グアテマラで初めて見た暴力に私はびっくりしたが、神聖な儀式を汚された彼らにはやむにやまれない行為という感じだった」⁴⁾

また、落合は日本人の宗教観について、つぎのように指摘している。

「日本人がよく理解できないことに、宗教問題と民族対立がある。単一民族・無宗教（信仰という意味において）のなかで暮らしている日本人には、どうもピンと来ないことが多い」⁵⁾

VI. 社会の国際化と若者の「常識」

国際化社会になっている現在、大勢の日本人が海外へ出かけて行くようになったが、その際、訪問した国で自国の常識がそのまま滞在国では通用しないと痛感し始めているのではないだろうか。時には、トラブルに巻き込まれて痛い目に遭うこともあるのである。

日本の外務省の「海外安全に関する意識調査」（2001年2月）⁶⁾によると、海外に滞在中に事故やトラブルに遭ったことがある人は12%を占めているということである。その中でも、つぎのようなトラブルを経験した人が相当の比重を占めている。

1. その他、現地の法令・規則違反 1.3%
2. テロまたはこれに起因する事態 1.3%
3. 暴動 1.3%
4. 交通事故〔列車・バス事故〕 3.8%
5. 自然災害、ホテル火災 5.0%

日本人にとっての「常識」の重要性について

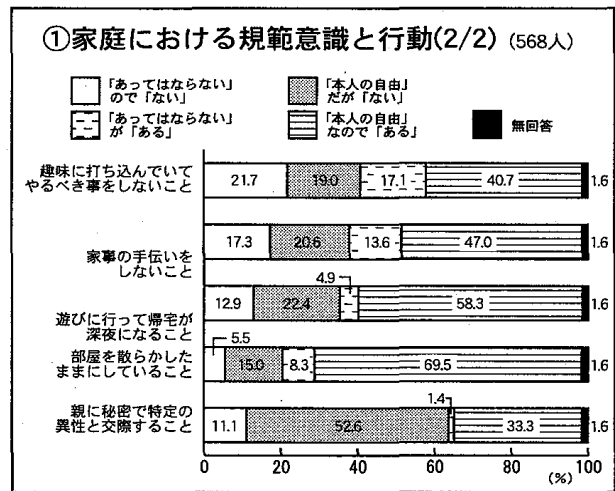
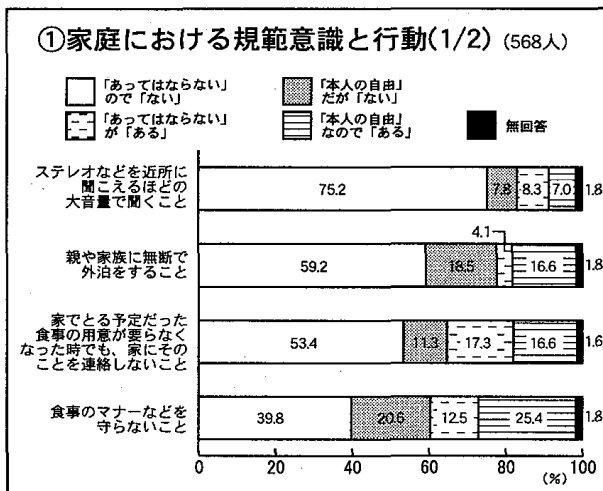
6. 強盗, 傷害 5.0%
7. クーデター, 内戦などの政治問題に起因する緊急事態 6.3%
8. 財布・航空券などの紛失 8.8%
9. 悪質タクシーなどの詐欺 16.3%
10. スリ, 置引などによる盗難 26.3%
11. 病気, けが 36.3%

また, 日本人自身, 特に若い世代の規範意識はどれぐらい崩れているのか。
次の資料は見てみよう。

[資料 / 1999]

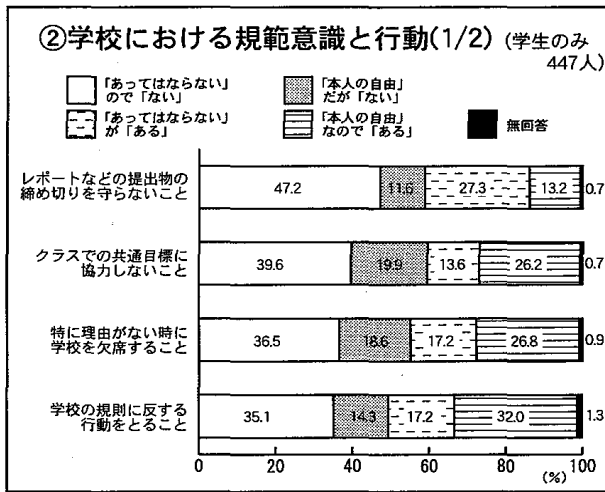
1. 家庭における規範意識と行動 (568人)

- (1) (2)

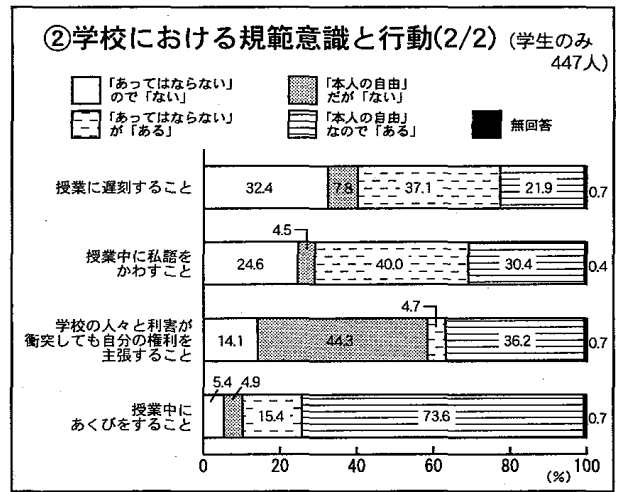


2. 学校における規範意識と行動 (学生のみ 447人)

(1)

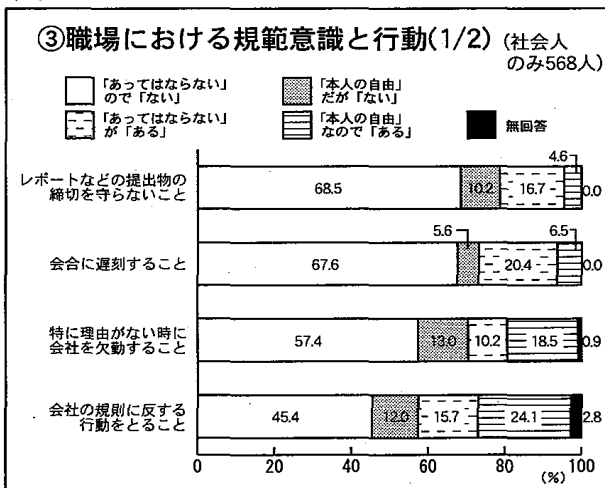


(2)

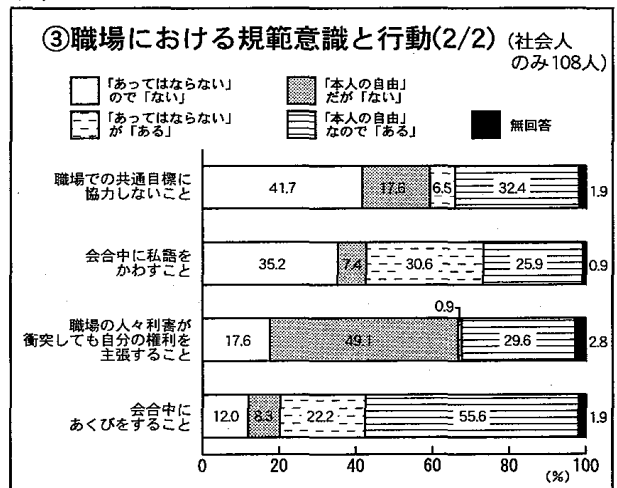


3. 職場における規範意識と行動 (社会人のみ 108人)

(1)



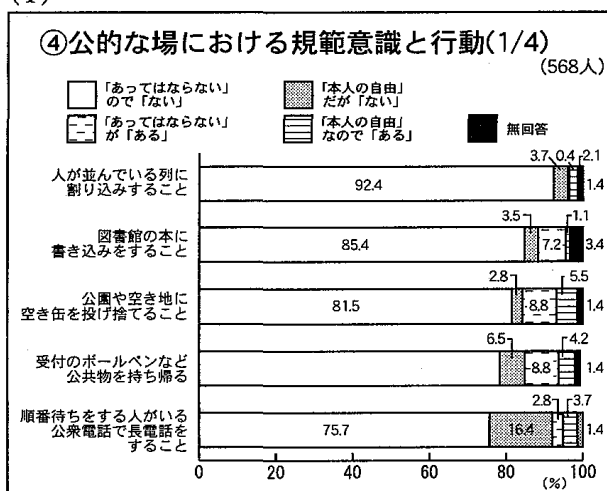
(2)



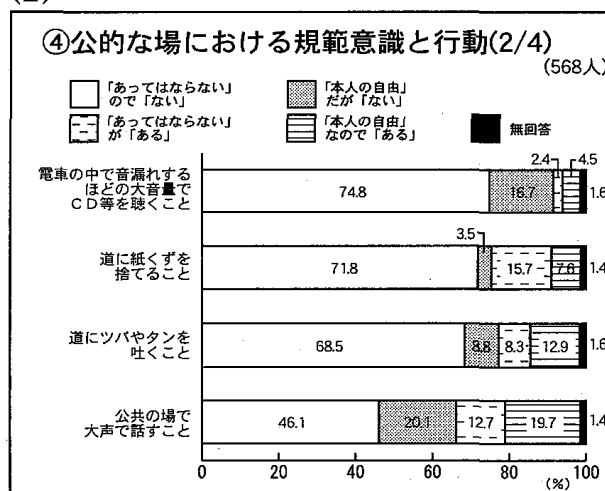
日本人にとっての「常識」の重要性について

4. 公的な場における規範意識と行動 (568人)

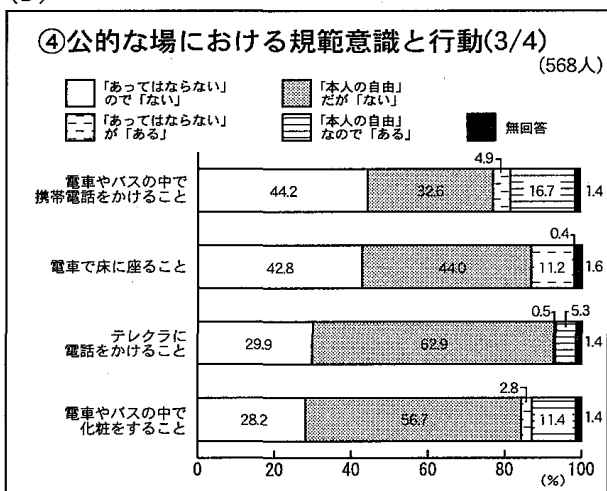
(1)



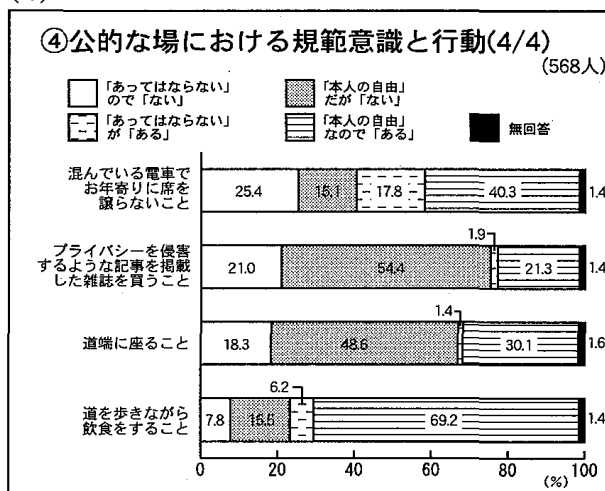
(2)



(3)



(4)



* 1. ~ 8. ライフデザイン研究所「若者の規範意識に関する調査」(1999年1月)より。全国の16歳~24歳の男女568人(学生447人・学生以外121人)から(03-5221-4773)⁷⁾

以上の資料から考えると、日本の若者の伝統的な規範意識はだんだん薄れていっていることがわかる。それに代わって、個人の自由を主張する若者の割合は増加している。

さらに、狂牛病の影響のために雪印乳業や日本ハムは輸入品の牛肉などを松坂牛に偽装し、消費者を騙す事件が相次いで発生してしまった。

ことに、近年来、外国人が洪水のように日本社会へ流れ込んでいる。それ

とともに外国人による犯罪が次から次へと起こっている。従って、日本本来の整然とした社会秩序が乱されてきていると日本人は考えているのではあるまいか。ここまで来ると、今までの規範意識や常識などはもう一度見直す必要に迫られてくるのではあるまいか。

おわりに

日本では社会が国際化に向かっている現在、文化や経済や貿易などの各分野における交流が一層盛んになりつつある一方で、様々な思いがけないトラブルに絶えず巻き込まれてしまう危険性が増加している。これは単に日本社会の問題としてのみならず、他の国々においても同様の苦境に直面している。従って、社会改革はどうしても避けられない状況になっていると言える。改革とは古くて、不合理なシステムやルールを改め、変えることである。それとともに、人の意識や価値観もどんどん変わってきているのである。と同時に、「今日の常識は明日の非常識」ということになるかもしれない。だから、やたらに古い常識ばかり主張することは、社会の進歩や異文化の交流や相互理解などを妨げるだけでなく、人と人との付き合いをも妨げる要因となると言えるであろう。

しかし、優れた常識なら、だれもが認めるところである。同時に、従わなければならない公共道徳、社会的常識、法律的常識などは忘れてはならない。いわば、このような常識は「国際化」ということを考える場合の基礎知識であると言えよう。

では、我々の日常生活における常識はどうであろうか。最先端科学の時代に入ってもなお、そこには数多くの迷信（伝説）が依然として残っている。特に、「みんなそう言っているから」というだけの理由で、自分もそれを守らなければならないという人が多いが、非合理的、非科学的な「常識」がいつの間にか一般的な定説となっていることもある。

たとえば、「古いテレビは電気代がかかる」とか、「電池は冷蔵庫で冷やす

と長持ちする」とか、「サツマイモを食べると、太る」とか、「酢を飲むと、寝つきが良くなる」とか、「糖尿病に日本酒はだめ」などといったものはその例である。

中国においても、それと似た例がある。

かつて「風呂の水をチョロチョロとためると、水道代の節約になる」という噂があった。なぜなら、水をチョロチョロ出した場合、水道メーターが回らないからだと言われていた。ところが、この噂はまったくのウソであった。家庭用の水道メーターの内部には、水車を横にしたような歯車がある。メーター内を水が流れると、その歯車が回転し、その回転数によって表示部分の針を動かす仕組みになっている。従って、チョロチョロと水を流しても歯車は回転するため、メーターは上がっていく。確かに、水を勢いよく出すよりも回転速度は遅いが、同じ分量の水がたまるまでには相当な時間がかかるのである。

もっとも、このような節約話になると、必ず「それで、うちは水道代がずいぶん減ったのよ」などという人が必ずいるものである。すると、みんなその馬鹿な話を信じて、真似をし始めたのであるが、結局、水をチョロチョロ出そうが、勢いよく出そうが、表示される水の量に変わりはないのである。

後日、新聞につきのような記事が載っていた。「それ（水をちよろちよろ出す）はうそである。ところが、わが国では水不足の問題はますます深刻になっている現在、せめて水を節約する（節水）意識を高めるには決して悪いことではない」

筆者はこの記事を読んだ時、この節水騒動の裏には姿の見えない何者かがあったのではないのかとの疑問を呈せざるを得なかった。

七十年代の頃、商品の値段に関するうわさが特に多かったのであるが、たとえば、「トイレペーパーの値段はこれから上がるのよ」と誰かに言われると、店の前には、すぐに長い列ができていた。その中に割り込もうとしただけで、みんなに怒られ、散々殴られた人もいたようだ。ところが、何年分のペーパーを抱えた人は喜んで家に帰ると、「あれは在庫品を処分したかっただけ

だよ」とまた誰かに言われたそうだ。その時には、あまりの自分の無知に一瞬ぽかんとして何も言えなかったそうだ。そのような経験を持つ人にとっては、もはや自分以外にはおそらく誰をも信用できなくなってしまうであろう。

その反対に、規範社会で育った日本人は人の噂や迷信を簡単に信用する。そのため、手相占いや血液型占い、あるいは悪霊などもよく話題になっている。また、テレビもそのような話題で大騒ぎする。さらに、日本人の家で仏壇や神壇を祭っているところが多くある。特に、大晦日の夜、みんな神社へ行き、冥福祈禱をする。出かけるときにも、暦を見る。一見、「宗教によらなければ私は生きてゆけない」といった感がある一方で、日本の僧侶は肉の料理を食べ、妻帯もできる。これは筆者にとっては、どうも理解し難いことである。

以上、中国との比較などを通して、いろいろな側面から日本人の「常識」について分析してきたが、日本人が常識を大切にするというのは特殊で、封建的な土壌の存在とは無関係だとは言えないであろう。

要するに、「常識」は専門知識ではないため、時と場合によっては合理性や科学性、あるいは普遍性に欠けるのは当然である。また、それは特定の地域において、みんなに認められ、初めて一般化し、通用するものであるが、一旦その限定的地域の範囲から逸脱してしまうと、「非常識」とされる可能性が大となってくるのである。まして、時代がどんどん変わっていく中で、知識の刷新も必然的にしていかなければならない。このような知識の半分は本から得られるが、残りの半分は経験から得るしか道は無いと思われる。

参考文献

- 1) 『「日本人」の素朴な大疑問』 著者 ハイパープレス 発行所 PHP 研究所
2002/07/15 発行 p.28
- 2) 『日本の常識を捨てろ』 著者 落合信彦 発行所 株式会社光文社 2000/06/10
発行 p.10

日本人にとっての「常識」の重要性について

- 3) 『日本語を反省してみませんか』 著者 金田一春彦 発行所 株式会社角川書店 2002/03/31 発行 p.156
- 4) 『日本の常識を捨てろ』 著者 落合信彦 発行所 株式会社光文社 2000/06/10 発行 p.123
- 5) 『日本の常識を捨てろ』 著者 落合信彦 発行所 株式会社光文社 2000/06/10 発行 p.112
- 6) 『DATAPAL データパル 2002 最新情報・用語資料辞典』 発行者 鈴木俊彦 発行所 小学館 2002/02/20 発行
- 7) 『DATAPAL データパル 2002 最新情報・用語資料辞典』 発行者 鈴木俊彦 発行所 小学館 2002/02/20 発行